

平成25年度京都型農林業プロジェクト これまでの取組みの概要

平成25年度京都型農林業プロジェクトでは、農山村地域等の活性化を図るための新しい施策立案を目的として、地域に埋もれた農林水産資源（食材）を掘り起こしや有効に活用するための検討を行っている。

今回は数多くある林産資源（森）と水産資源（川）の中から、モデル資源をそれぞれ1種類抽出した。モデル資源の抽出には、以前から利用されていたことや活用に向けて先進的に取り組む団体に考慮した。

そこで、林産資源（森）からは、京都の森林にも比較的多く自生し、特に京北の合併記念の森に多く見られるクスノキ科の落葉低木「京北産クロモジ」を選んだ。クロモジは薬用植物であり、材は高級楊枝に加工して利用されている。

また、水産資源（川）からは、市内の川に多く生息し、冬に旬を迎えるオイカワ（ハエ）を選んだ。特に鴨川のオイカワの稚魚は、「鷺知らず」と呼ばれ、今は見られなくなったが、かつては醤油などで炊いたものが京土産として売られていた。

これらの活用に向けて、現状と課題を把握するため、それぞれの活用実証調査を実施することとし、クロモジの活用実証調査については、合併記念の森でクロモジの活用に関心を持って取り組まれている樹々の会へ、鷺知らずの活用実証調査については、鴨川の水産資源の増殖に取り組まれている賀茂川漁業協同組合へ委託した。

■第1回京都型農林業プロジェクト有識者会議

日 時 平成25年12月6日（金）午後3時～午後5時
場 所 本能寺文化会館 西館5階「雁（かりがね）」
出 席 者 委員，樹々の会，賀茂川漁業協同組合
概 要

【クロモジ】

- 試飲したが美味しい。様々な加工が考えられるが、例えば、葉の粉末化ができないか。
- 実際のクロモジを知らない人がほとんどであり、クロモジファンを増やすことが重要である。

【鷺知らず】

- 北大路魯山人の書に登場することや鴨川で古くから漁獲されていたことなどのストーリーはメリットとなる。
- 鴨川の資源量が少なければ桂川も含めた京都産という商品提供を考えていくべきか。
- 資源量が少なければ、値段では勝つことができない。
- 鷺知らずの食文化の再生によって、川的环境改善に市民の目を向けられればと思う。



■水産資源活用検討モデル「鷺知らず」現地視察及び意見交換

日 時 平成26年2月12日（水）午前9時～正午

場 所 【現地視察】鴨川左岸 団栗橋付近 京都水族館山紫水明ゾーン
【意見交換】京都水族館 会議室

出席者 委員、賀茂川漁業協同組合、京都水族館職員

主な意見

- 鷺知らずを採捕するところを見せるとともに、その後、料理として提供するようなことができないか。
- 増水に伴い流下したオイカワが、川の落差工の存在で遡上できない状況により、生息域が偏っている。
- カワウが鷺知らずの群れを全滅させるくらいの食害が深刻な問題となっている。釣り人による追い払いによって資源が守られている状況である。
- 京都市の食文化の1つのシンボルになる。
- 漁期（現在12月末までとなっている。）に限定漁師が漁獲するなど、漁の詳細な取り決めが必要である。
- 市民に鴨川の魚を食べてもらうことに意義がある。

※京都水族館では約100名の試食アンケートを実施した。

- ・知らない方が大半。いやな味との回答は無かった。
- ・鴨川に漁協があることや、食べられる魚が棲むことは知られていない。



■林産資源活用検討モデル「クロモジ」現地視察及び意見交換

日 時 平成26年3月7日（金）午前11時～午後3時30分

場 所 【現地視察】合併記念の森
【意見交換】道の駅ウッディー京北 研修室

出席者 委員、樹々の会

取組状況

樹々の会で採集や加工・栽培を行っているが商品化のための資金集めは難しく、商工業との連携は話がまとまっていない。なお、市内の大学生に商品ラベルのデザインをお願いしている。

主な意見

- 複数の完璧商品を求めるよりも法規制ハードルも低いクロモジ茶の商品化からでも始めてはどうか。
- 綾部市古屋のトチへの京都生協の取り組みは限界集落支援という「正義」を高く掲げて組合員から支持を得ている。
- 最近は急須はあまり使わない。ティーパックが良い。入浴剤はどうか。
- 売価の一部が合併記念の森の植樹に使われるとかの仕掛けも必要か。
- 商品の向こうにどれだけの「森」が見えるのか、物語性が大切である。
- 合併記念の森で行われている市民協働活動にクロモジを活用させるべき。

